「WHY WHY 百科事典」

四万十川・百のなぜ？

四万十川が日本一美しい 100 の理由

四万十川の畔に住んで…四万十川の情報を…
「四万十川新聞」と名付けて
知人友人に送り続けてもう 10 年が経ちました。

ほとんどを記録してなかったのは内容に自信がなかった為ですが
この度、記憶を頼りに写真を見ながら整理しました。

笑ったり、泣いたり、怒った記録集です。
笑って、怒らずに読んで下されば幸いです。

文中に出る「四万十太郎」が私で「花子」が妻です。

流域圏学会会員
四万十川流域住民ネットワーク代表世話人

西内　燦夫

mailto:taro410@adagio.ocn.ne.jp

四万十川…
日本最後の清流と呼ばれて…

四万十川とは「日本最後の清流」「日本人が最も行ってみたい川・NO.1」だが…いつのころからこの王座に就いたのか？そしてそれは何故なのか？を考えてみた。

「王座」の詮索は置いといて、その理由とは考えると面白い！

四万十川が日本の河川で最も高い評価を受ける為に地元民が「発案・企画・実行」した形跡はない。つまり地元民を含め誰もが四万十川の価値を知らず、かつ有名にするための意図も意欲も何処にも存在しなかったのだ。ではどうして？

それは「NHK の 30 分の全国放送」がきっかけで「日本人の郷愁」に火が点いたのである。

驚いたのは「NHK」ではなく「地元民」だった。

日本の「落ちこぼれ」…四万十川！

明治政府以来、日本は「工業立国」「中央集権」を追求してきた。実は「四万十川」とはその「国策の副産物」なのである。

「中央集権」は日本に「過疎・過密」を作った。
「工業立国」は「便利・時間」の追及をし「不便」を排除した。

以上の結果「都会は過密」となり「便利と効率」の玉手箱となった。逆に「田舎は過疎」となり「不便とのんびり」のおもちゃ箱となった。国策の意図した結果は都会に現われ、田舎はその成功の負の副産物として出現した。しかし…いずれもが「失敗」という結果ではなかった。

昭和 58 年に NHK が、四万十川は「自然と人の共生の見本」だとして、全国放送をした。その冠は「日本最後の清流」であって、高度成長を斜めに切ったものだった。しかし、その日から「日本人の行ってみたい川 NO.1」になったのだ。

「過疎と不便」に耐えて来た人々はこの日を待っていた訳ではなかったので、驚き、しばらくは蹲っていたのが本当の歴史なのだ。

その後、四万十川ブームが発生するのだがこれには二人の政治家の力が大きく働いたと云える。それは「竹下登首相」と「橋本大二郎高知県知事」である。

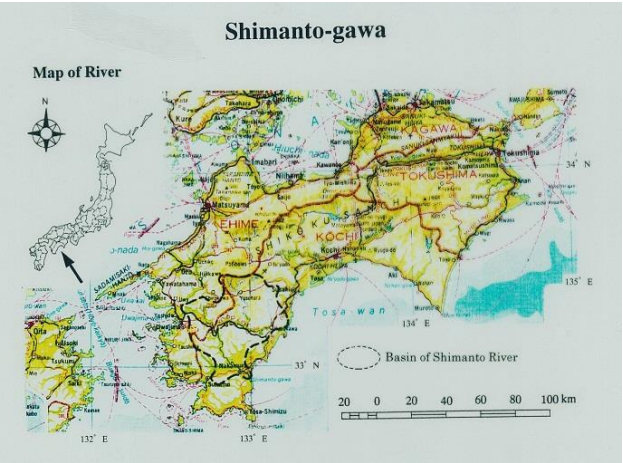
竹下首相は「ふるさと創生資金」を打ち出し、橋本知事は県庁に「四万十川振興室」を作った。固有名詞のつく課は全国でも例がなかった時代の大胆行動だった。

「「日本最後の清流・四万十川」」とは…
物理的なチャンピオン項目は少ない。

イメージの世界では「日本一」の川だが…実は…

名称	長さ	面積	人口	支川数	ダム数		BOD
単位	km	km2	千人	本	ヶ所	ヶ所	ppm
吉野川	194	3,750	641	356	23	4	0.8
那賀川	125	874	59	75	4	3	0.7
土器川	33	140	35	11	2	0	3.9
重信川	36	445	233	75	8	0	5.0
肱　川	103	1,210	112	475	8	2	1.0
物部川	71	508	40	35	4	3	0.7
仁淀川	124	1,560	105	166	5	3	0.7
四万十川	196	2,270	100	319	5	0	0.6
日本一	信濃川	利根川	利根川		石狩川		
	367	16,840	12,140		83		
大和川	68	1,070	2150	178	11	1	12.1

名称	長さ	面積	人口	支川数	ダム数		BOD
単位	km	km2	千人	本	ヶ所	ヶ所	ppm
大和川	68	1,070	2,150	178	11	1	12.1
四万十川	196	2,270	100	319	5	0	0.6
日本一	信濃川	利根川	利根川		石狩川		尻別川
	367	16,840	12,140		83		0.4



四万十川の状況

一級水系とは「国土保全や住民の安全や経済上重要として国が指定した水系」として河川法上指定された水系のことを言い、国内には 109 水系あるが在る。渡川水系（現在の四万十川を言う）もそのひとつで、その中でも四万十川とは特筆すべき数値を持った河川ではない。むしろありふれた川のひとつなのである。
流路延長は四国内では最長だが全国では 11 番目、流域面積は四国内でも２番目で全国的には最大の利根川の 1/8 でしかない。数値を整理すると次の表のようになる。

名称	長さ	面積	流域人口	ダムの数		BOD
単位	km	km2	千人	全流域	本川	ppm
日本一	信濃川	利根川	利根川	石狩川		尻別川
	367	16,840	12,140	83		0.4
四万十川	196	2,270	100	5	0	0.6
全国順位	11位	27位	四国内5位			
以下・四国内の河川の参考値						
吉野川	194	3,750	641	23	4	0.8
那賀川	125	874	59	4	3	0.7
土器川	33	140	35	2	0	3.9
重信川	36	445	233	8	0	5.0
肱　川	103	1,210	112	8	2	1.0
物部川	71	508	40	4	3	0.7
仁淀川	124	1,560	105	5	3	0.7

このように物理的には特筆すべき河川ではない。ごく普通の河川である。しかしながら、下表のように国民の人気は断トツの NO. 1 である。つまり…イメージの世界では「日本一の川」だと言えるのだ。

何枚だ？千枚だ！

神様が住む天空の田

四万十川上流「梼原町」に千枚田がある！
ここは江戸時代に坂本龍馬が脱藩する時に、縦に駆け上がったと云われる場所である。

「車」とは不便な物で、この坂を上がるにはジグザクに右往左往しないとあがれない！また…

「車」とは乱暴な物で、山に穴を孔けなければ役に立たない。ここには「工業と環境」「速度と景観」のアンバランスのバランスがある。

棚田を守り保水力を維持し、それが「緑のダム」となり、かつコンクリート構造物を拒絶できれば、三つの役に立つ！

① 保水 …地球温暖化防止+洪水防止。
② 景観 …里山維持のためには大切！
③ 環境 …生物多様性に有効。

「減反廃止」「棚田復活」は四万十川の生命線である。

斜張橋

この狭き空間

四万十川の景観に似合うか似合わないかの詮索は置いといて，なんで四万十川にこんな瀬戸大橋に似た橋があるのでしょうか？

実はこれは「農道橋」で橋脚が一つしかないことから現われたのです。
当時の西土佐村長が「カヌーの客には柱が少ない方がいい！」とばかりに、高額の橋を採用したそうです。

景観については賛否があるのですが、沈下橋より安全なことは言うまでもありません。

土木学者　「土木の粋が詰まってる！天晴れ！」
観光客　　「喝！」

評価は立場によって異なるようです！これは何処にもある物語です。強いて多数決で悪者を作る必要もない問題です。

「半家」沈下橋

「はげ」…と読んでネ！

源平合戦に敗れた平家の落人が、後から来る仲間の為に「平家」と書くと源氏に見つかるし、かといって判らない地名ではまずいので「平」の字の上の横棒を下にして「半」とし、読み方も「はげ」とした由緒ある「隠れ里」です。

読み方を嫌がる人も居ますが、平家の末裔の文化が根付いている集落がひっそりと現存しています。

その半家の沈下橋のたもとの立札には「アイガモの親子に地元の子供が餌付けしてます。ハンターは撃たないで」と書いてあります。なんだか平家の落人が書いたような気がしますね。

きっと苦難の歴史が人を優しくしたんでしょう。

太郎　「中村に”Half House”って店があるけど…」
花子　「きっと経営者は“半家”の出身の方ね！」

初日の出の「とまろっと」

四万十川的には「河口」です！

正月元旦の「初日の出」には沢山の人が集まる！
天候が良いと「日の出」は美しいが…冷える！こじゃんと（すごく）寒い！
それでも一年の始まりに「寒さ」なんぞなんのその・・・

その昔、四万十川の山奥から「薪や炭」を京阪神に運ぶ時，舟母と云う川舟でここまで運んで、この公園の麓の「下田港」で大きな海の船に積み替えた。栄枯盛衰の丘に「日はまた昇る！」

松過ぎて四万十川から海に出る　漁師の眼光靄を貫く

「松」とはお正月の松飾りのある期間

漁師さんの暦は「自然界のサイクル」が優先されます。
昼夜なし！日曜祭日なし！正月なし！だが…家族が出来、テレビが普及すると「せめて正月ぐらいは休むぜ！」となります。
三ヶ日を休んだ漁師さんは一月四日の朝早く、日の出と共に出漁です。

汽水域とは「海水」と「川の水」が混在する水域を言うのですが、比重の関係で「海水」が下で、表面が「川の水」です。

ここは「海」にみえますが、実は汽水域です。だから、海と川の両方の色々の魚を見ることができるのです。春先には「アユの稚魚の幼稚園」に匹敵する場所でもあるのです。生物多様性とは環境多様性でもあるのですが、そこには季節多様性が必要なのです。

四万十川で確認された魚の数は 210 種。日本一ですが、その殆どはこの汽水域で確認されたものなんです。

太郎「四万十川にも“秋葉原”があるのですぞ！」
花子「無理やり“秋葉原”と言う時に嬉しそうなのはなぜなの？」

佐田沈下橋

橋脚の色はイタリアン

四万十川に沈下橋は 47 ある。この写真の橋は最も下流の「佐田沈下橋」で最も長くて 291mある。戦後の築造ながらダンプカーが走る産業用だった為、老朽化が早く進み 38 本の橋脚を補強した。

その補強材の「色」を決めるに当たっては、市長が漁協に相談した。
なぜならば、橋の管理は市で、その下の川では漁業が行われていたからだ。
その当時は「観光」に視点が及ばなかったようで「魚の好む色」として漁業関係者のみの一声で、この色が決まったという。多くの市民は驚いたが、その時はもう遅かった。

橋の下では「春の風物詩」の「鮴漁」が行われます。
「鮴」とは「ごり」と読むハゼ科の魚で、河口から五里の水域に住む魚で四万十川代表選手の一人である。この色で良かったのか聞いてみたい。

君は覚えているかしら　あの白いブランコ

四万十市入田

四万十川河川敷内の柳自生林の低木を伐ったら菜の花が咲いた！　春には子どもたちの歓声が響く！

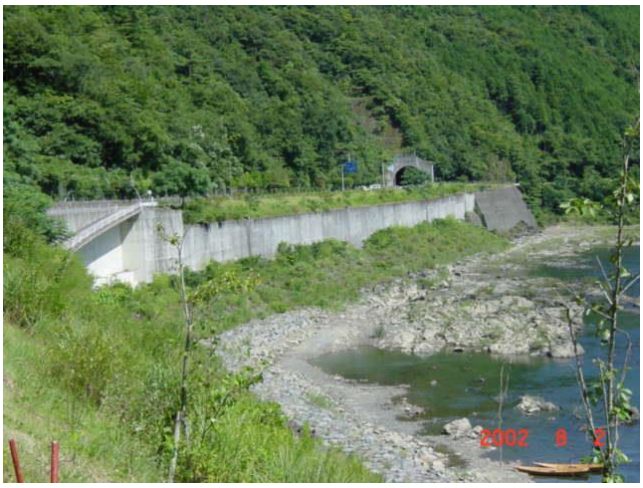
矢張り「花の美しさ」の為には「背景」が必要で、主人公が菜の花の時は、柳と四万十川が背景となる。

花が咲くと「女性が騒ぐ」すると「子どもが追随する」そして少し離れて歩く癖の「男」が後に控える。つまり「花の時代」に男は傍観者に近い。

しかし…花が咲くまでの苦労はほとんど男性が行う！
それに感謝を求める男性も居ないが、礼を言う女性も居ない！
野の花は自然に美しく咲くものだと思っているようである。

コンクリート護岸は四万十川の敵か？

四万十川中流



③　水際は厚化粧

四万十川に沿って走る道路は「直線化」や「拡幅」を試みると広報の選択は、消去法からどうしても「垂直のコンクリート壁」が必要となる。

①　四万十川ブームが発生するまでは「感謝されて工事が進んだ！」
②　四万十川ブームが起きると無機質景観だと敵視された。
③　足元に巨石と盛土と緑化工事が進んだ。…（写真・上）
④　新規には「張り出しスラブ」で水際には手をつけない工法採用
⑤　四万十川ブームが下火に向かった。
⑥　東日本大震災が起きた！
⑦　工事の予算が回って来なくなった。…⑥⑦は余計な話かな？

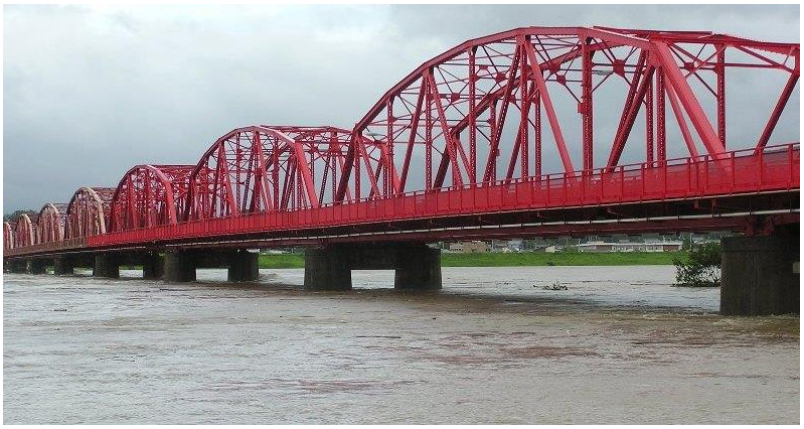
④張り出しスラブ

川の生命線である水際を守れ！これを「四万十川水際作戦」と呼ぶ？

南の国にも雪は降る！
しかし……雨も降る！

四万十川にも雪は降る。
南国だから滅多に降らないのだが、その稀な雪が「お正月」だったら感激度は 200%である！

気象の変化とは恐ろしくも楽しいモノで、夏には日本最高の 41℃を記録するも、冬には雪化粧するのだ。
しかし、もっと驚くべきは…これである！



最高気温 41℃　豪雨　降雪…「目玉気象のデパート」なんです！

四万十川は「環境先進地」
四万十川方式は海を渡る！

20 年程前…小規模集落浄化施設が四万十川各地に試作された。
流域内に 10 か所以上設置されたが、その後の維持管理に対する温度差があって、今ではここ「県立幡多農業高校」敷地内のものが BEST だと言われている。

そこへ高知工科大学の村上教授が、アフリカの「フランス語圏」の JICA 研修生を引率してやって来てくれる。教授の言葉を借りると「最も成功した例」だからだそうだ！

研修生は学生ではなく、各国の中堅行政マンなので「国の浮沈」が掛っているのか、すごく真剣である。

環境の先進地四万十川の誇るべきは「風景」だけではないのだ！

太郎　「あいつらフランス語ばかり喋るから判らねえんだよ！」
教授　「英語も話してましたよ！」
太郎　「あれー！」

この浄化施設は「四万十川方式」と呼ばれている。

沈下橋

ある献身

延長 196km の四万十川とその支流に 47 の沈下橋が架かっている。それらは全て「直線・水平・水没」という共通の特徴を持っている。

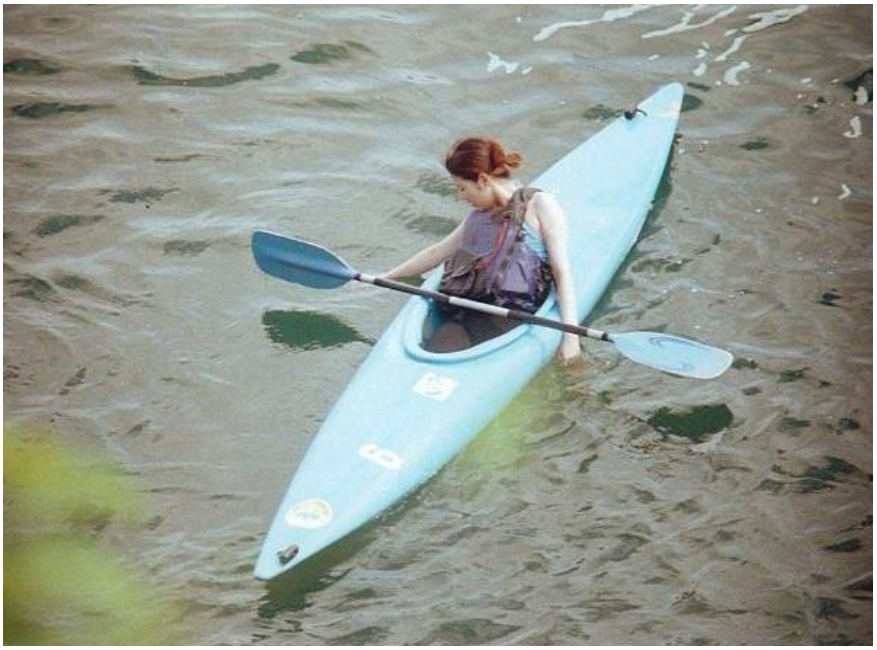
「直線・水平」の理由は「技術力の稚拙」そして三つ目の「水没」の理由はこの地方の「経済力の脆弱さ」を物語っている。

年に数回の大水の時には、我身を犠牲にして、耐えて耐えて我が身を守ることによって、その地域の人々の生活を守って来た。その背景には「車社会」の到達が遅い遠隔地方の「生活の知恵」とも云える橋である。

車が発達し高速道路が整備されると、都会からこの橋を見る為に多くの観光客がやって来る。

禍福は糾える縄のごとし…不幸の産物に注目が集まる今日である！

私をカヌーに連れてって！



カヌーとは案外とシンドイ遊びである。なぜなら…基本が「セルフサービス」で慣れない初心者にとっては辛い！その上「命の危険」とも相乗りである。一人乗りなら尚更、救助には他人を当てにはできないのだ。

等との否定的心配事は、四万十川に出るとすっかり忘れるのが常である！競技でない限り「流れを遡ることはない」ので、何もしなくても四万十川の流れと同じ速度で下流へと向かえるのだ。

その間に「岸辺の花発見」「鳥の声に感激」「屋形船と接近」等の楽しみ方をすれば、もう一人前のカヌーイストのセリフを口にすることが出来る。それが「大学教授」や「弁護士」だったら征服したような表現が出来る。黙ってそれを見ている四万十川とは、川も広いが心も広いのだ。

「百聞は一漕ぎに如かず」のようである。まあ来てみいや！案内ならば…
mailto:taro410@adagio.ocn.ne.jp　ぜよ！

太郎　「本当に来たらどうしよ！」
花子　「大丈夫！こんな文、誰も読んでないわよ！

トンボ公園

みんな友達 **四万十川で最も美しい沈下橋**

大河の“おへそ“

四万十川の延長は約 200km あるが、その中間点、つまり河口から約 100km の地点にこの「向山沈下橋」がある。

曲線が美しく、47 橋の中でも最も美しいと私は思っている。沈下橋が有名な四万十川でも観光的価値は最高！だと思っているのだが、何せ交通の要所からは遠く駐車場や公衆トイレがないことより人影は少ない。

四万十川の中間点＝「四万十川のヘソ」として売り出せば観光客は来る！「どうぜよ？」と提案したら誰も返答しなかった。だから今日も昔のままである。

四万十川は「過去と過疎の贈り物」＝「昔のまま」が売りだとすればこのままでいいのだろうが「勿体ないような」気もする！しかし…

花子が云う！　「やはり野に咲け蓮華草！」

ジャックと豆の木？
Four dollars

防犯灯に「ジャックの執念」が纏わりついた?…いえいえ…
これは公共施設内の「防犯灯」なのです。
理由は次の内どちらかです。

① デザイン的に素晴らしい…と意図した？
② ここまで維持管理の手が回らん！

いずれにしろ「自然」とは「美」と繋がる力をもっているようです。自然とは成長する力を持っている！

太郎 「日本は放置国家だ！」
花子 「日本は法治国家よ！そんな洒落なら 4 dollars！」

太郎はいつも花子に先を読まれているのです。しかしそれでも幸せなのです。

四万十川の下流「中村」には世界初の「トンボ保護区」がある。
沢山のトンボと四季の花が有名だ。http://www.gakuyukan.com/

この公園は「トンボ」に絞って発足したのだが、ある時期「水族館」を併設した。その水族館の魚種も「四万十川の魚」だけでなく東南アジアの魚も飼うようになった。ピントがボケた！客足も遠退く結果となりつつあるが、職種が増えた分、経費は増加した。

民間事業ならとっくに「倒産」だが、第三セクターなので赤字は市が補てんして営業は続いている。今年は都会のコンサルに委託して打開策を検討中だというが、儲かるのはコンサルだけだろう！

花火の敵は「雨」…四万十川の敵はゴミ！

夏の終わりは花火

今の日本は「平和」、そして…今の日本は「平等」

だから、どこの町や村へ行っても「野球場」と「図書館」と「道の駅」がある。そして「花火大会」も金太郎飴の如くある！その花火大会の共通項は「水辺」である！

だから「花火大会の優劣」=「個性」はその「水辺の良し悪し」で決まる！そこへ行くと四万十川には「日本最後の清流」と云う背景がモノを言っている。

しかし…心得ておくべきは「花火は一瞬」と云うことで、「環境」も大切にしないと花火の如く…と云うこと da！
ここで一句

「遠花火　往生際の　話など」

カヌーとは四万十川を体感するには最適だが…

カヌーは外来種

四万十川にカヌーの客は年間 1.7 万人来ると推定される。そして、その観光収入は 250 万円といわれる。しかし、地元民がカヌーを所有し、カヌーで川遊びをする話はあまり聞かない。なぜか？それには二つの理由が考えられる。

① 食えん遊びはせん！
② 漁もせんような「非生産性」は無駄！

カヌーの艇体の色は派手だ！これはレスキューの為に考えられているので自然界では目立つ！景観的には下品である。だから四万十川の景色としての「外来種」である！

太郎はフイリッピンホステスにも馴染みは居るし、カヌーにも乗るが、ブラックバスは嫌いだ！という「二面性」を持っている…都合のいい人間なのである！

花子　「あなたには環境を語る“資格“なし！」
太郎　「キャン！」

太郎の“死角”は家庭内にあった！

四万十川は日本一！

2013（平成 25 年）8 月 13 日にアメダスの気温 41℃を記録した。これは「日本一」だそうで、観光関係者はこれを「朗報」だと喜んだ！そして漁師は天を仰いだ。

「日本一とはめでたい！ビジネスチャンスだぜ！」
「これで今年の鮎は駄目だ！きっと来年も駄目だ！」

かくも「気温」だけで四万十川は大騒ぎである。如何に数字が大切かが判る！二番目だったら銀メダル！それじゃスポットライトは届かない…今年からチャンピオンだ！　　平和である！

かくして、今まで商売に熱心でなかった行政マンまでが動いた！

暑さのせいかな？それとも「空気が読めた」のかな？平和である！

花子　「夏は何処でも暑いと決まってるわよ！」
太郎　「キャイン！」

落ち鮎解禁の時

12 月 1 日…日の出

落ち鮎漁はこの地域に住む男達にとっては「麻薬」のようなものだ。昔の解禁日は市民総川原で、朝から憑かれたように屋外パーティーだったそうである。しかし最近は鮎が減った！

鮎の減った理由は、鮎が喋らない以上憶測でしかないが…

① 上流の佐賀ダムの取水
② 中性洗剤等による水質の悪化
③ 杉・ヒノキによる山の荒廃
③ 砂利の採取
④ 地球温暖化による海水温の上昇
⑤ 伏流水の減少

しかし、大切なことを忘れてました。

⑥ 漁具の発達による捕り過ぎ！

色々の評論を他所に、解禁日の様子を撮影したいカメラマンだけが増えています。

夏祭り

子ども提灯台

中村の「夏祭り」の子ども用の提灯台が復活した。
最初の年は人集めの容易な我が少年サッカーチームが担いだ。

担いだと云っても車輪が付いているから「手押し車」状態なのだが、交差点ではぐるぐると回って景気づけをする様は、大人と同じ盛り上がりだ。

バブルがはじけた頃は、この提灯台を準備する力も無くなって姿を見せなくなっていたが、平成 23 年の今年復活した。

お祭りとは「景気」のバロメーターで、観光とは「平和」のバロメーターだとよく判った。

何事でもそうだが「準備と後始末」が大変だが、子ども達は「来年もやりたい」と騒ぐ！大人たちは「これじゃいかん」とも思うが、「これでいいのだ！」とも思う。せめてもの救いは「有難うございました」の最後の大声だ！

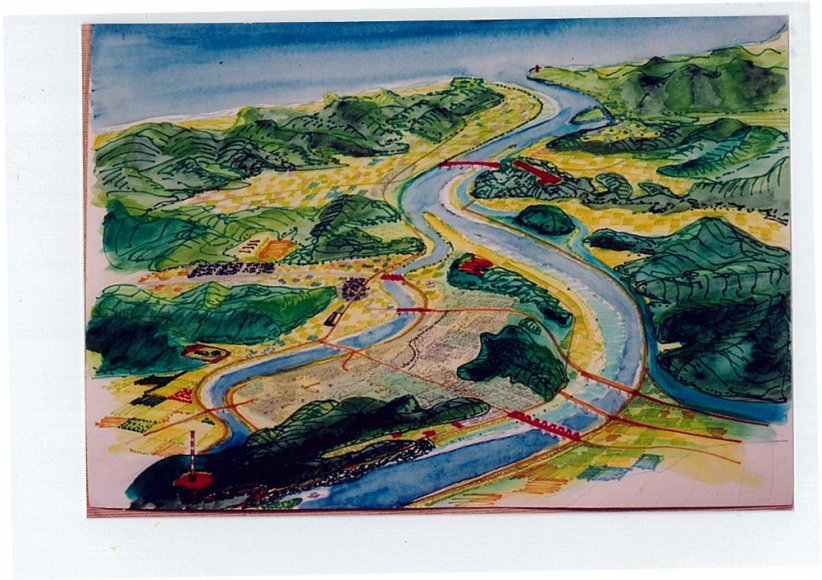
御衣黄

「ぎょいこう」とは「緑のさくら」

四万十川に数本しかないが「御衣黄」と言う名の緑色のさくらが咲く。持主はその貴重性も名前も知らないから誰も大騒ぎをしないが、この鈍感さが昔の「四万十川ブーム」到来時の地元民のそれに似ている。

桜の花は、白やピンクの方が美しい。緑のさくらとは色が地味なのと、多くの桜よりも遅れて咲くから注目され難いのだろうが、その「貴重性」と「地味さ」と「話題性」において「四万十川」ブームに似ている。花子の写した桜と比べて下さい。

ある中学生の描いた中村



「立て板に水」と言う言葉がある。淀みなくよく喋ることを言うのだが、川の水が淀みなく流れる時は「直線」ではないのだ。

四万十川も上から見れば良く曲がっている。しかしこれが自然で滑らかなのである。

これに較べて多くの「都市河川」は直線化と生活の場の水際接近を図る。かくしてトラブルは人間の手の多く掛かった都市河川から多く発生する。すると災害復旧工事が出来るから建設業者は都会で経営する方が利益が上がる。その証拠に四万十川の建設業者は「草刈り」で利益を追求しているのだ。

花子　「今日の四万十川新聞は「クサカッタ！」？

不破の八幡さん

国の文化財である！

不破と書いて「ふば」と読むが、この「不破八幡宮」には由緒あるこの地方の神々の総大将的神さまが祀られている。

毎年 10 月 10 日頃にここで「神さまの結婚式」が行われる。
神さまの結婚式とは、応仁の乱の頃、京都から来た公家が、この地方の「略奪婚」を戒めるためにはじまったとされるもので「歴史と理由」そして「由緒と伝統」のある儀式なのだ。

写真は「駆け馬」だが…この儀式は車社会の発達と、畜産業の衰退でしばらくなかったのだが、県立農業高校の協力を得て最近復活した。この儀式に参加した馬術部の高校生が「国体優勝=日本一」になったことより御利益は保障付きとなっている？

逝去された神主さんの文章を許可を得ていたので次ページから 4 枚添付します。

不破八幡宮の概要

不破八幡宮は高知県四万十市(合併前の中村市)に位置し、凡そ五百四十年の昔、京都五攝家のひとつである一條家の教房公が応仁の乱を避けて荘園経営のため中村に開府のとき幡多の総鎮守とし、また一條家守護神として石清水八幡宮を勧請したものである。

崇敬者

一條家の特別な崇敬は勿論のこと、その後の各時代の為政者、即ち・長宗我部氏・中村山内氏・その廃藩後の郡奉行の特別な崇敬もあり幡多の総鎮守として今に至っているとは云うものの大東亜戦争終戦後は暫く鳥居をくぐる人の数も跡絶えていた。しかし今では旧来に戻りつつある。

社殿

特に本殿は一條氏勧請の当時、京都より大工棟梁・北代右衞門を招き建築させたもので、拝殿その他はその後の為政者によって上作事（うわさくじ）といって造営を施してはいるが本殿のみは建築以来（修理はするにしても）再建されず今に至り、建築様式は室町中期を下らない部分もあり、また部分によっては室町末期の風を現してもので都風に洗練され

た優美な手法や彫刻には地方色豊かな大胆な手法を示しており、屋根は三間社流造り柿葺（さんげんしゃながれづくりこけらぶき）で昭和二十八年に県の保護文化財の指定を受け、十年後の昭和三十八年、国の重要文化財の指定をうけ、昭和四十年より同四十一年末、解体復元工事を完了した。

境内神社

境内には三島神社（祭神大山祇命）住吉神社（祭神中筒男命、底筒男命表筒男命）の攝社があり、また高良神社、若宮神社の末社がある。

現在の状況

不破八幡宮・秋季大祭

一條公開府の当時、未開のこの地にあった「嫁担ぎ」（夜這いともいう）の悪い風習を改めるべく、祭りによる指導の方法を考え、一宮神社より女神を…不破八幡宮より男神を迎え、四万十川を利用して神様の結婚式を執り行って、一市一村（西土佐村）の人々を一ヶ所に集合させ、それぞれ負担する物納として、石掛り、土地の産物を割り当て、係りも交代で担当させ、神聖な結婚式の在り方を教えた祭りで、奇祭として全国的に有名であり、大東亜戦争中も一年たりとも休まずに執り行われて来た。

四万十川での神輿洗い

神事の佳境

男神輿のお出迎え

http://www.city.shimanto.lg.jp/kanko/spot/meisho/fuba.html
http://100.yahoo.co.jp/detail/%E4%B8%8D%E7%A0%B4%E5%85%AB%E5%B9%A1%E5%AE%AE/

文責　亀谷加壽子

バブル崩壊の頃

腕白でもいい…逞しければ

四万十川上流域「梼原町」にこの石碑が建っている。
坂本龍馬「脱藩の道」のすぐ近くである。

気ぜわしい日本人を諫めるこの短文はバブル期に現われた。テレビでは
　「腕白でもいい、逞しく育ってくれれば…」
　「物より思い出」
等のコピーが流行っていた頃だった。石碑までが建てられるほどの反響だった。それほどまでに日本人は前のめりだった時代があったのである。

その懸命さの反動で「日本最後の清流・四万十川」が生まれたのだが、今の若者はこの石碑の内容よりも「天然ウナギ」を食べる事に懸命だ！

　太郎　「英語に書いたら「Walk Don't Run」かな？」
　花子　「Where have all the flowers gone?…かな？」

あったか四万十川　あった土佐

一人旅 OK!不倫旅行も OK!

旅行の人数は色々の場合がある！
孤独な一人旅　ハネムーン　サークル　家族…場合によってはシャッターを押す人が不足する場合がある。そんな時の為にカメラにはセルフタイマーという機能が必ず備わっている。しかしその機能を利用するには「三脚」が必要となる。その三脚を忘れた人の為に、四万十川ではこんな気のきいた「三脚代わり」がある。これには「笑い話」がある！

NHK の「土佐の一枚」に投稿したところ採用された。
　太郎　「どうでい！」
　花子　「それは私の写真よ！」
　太郎　「？」
　花子　「だってあなたのカメラが写ってるじゃない？」

これ以上の「アリバイ証明」を見たことがない。

これは「ダム」ではない！
しかし「ダム」だよねえ！

日本の河川法での定義は「堰高 15m以上」をもってして「ダム」と呼ぶ。
この堰は「扉の高さ＝8m」なので「ダム」とは呼べない…そうだ。
従って四万十川（本流）にダムはない！とされる。しかしちょっと待て！
「水」から見れば 8mでも「人」から見ると 30mの構造物があるじゃないか！…という四万十太郎の独り言に耳を傾ける人はいない。

唯一理解を示してくれる友達は、言葉を発せないから「発言力」がない！
その友達の名前は「鮎」である！

ただ、この取水事業は「発電用」で 3.11 以来の状況では納得せざるを得ないのが実情である。

太郎　「仕方ないなあ！」
＊＊　「そんなのありかよ？」
太郎　「Who are you？」
＊＊　「吾輩は鮎である！」
このダムの名称は「佐賀取水堰」である。設置者は「四国電力」

中村の「市花」は藤

ある自立

中村市（現在の四万十市）の市花は「ふじ」である！
その藤の花の公園が整備されている。毎年 4~5 月には美しい花を咲かせ市民の憩いの場所となっている。歴史的にもこの花はこの街を造った公家の家紋でもあったらしい。

戦後、日本において、地方都市の多くは衰弱の一途を辿っているが、この中村市もそのひとつである。地方債などの国や県の援助がないと自立できない。

そう思って「藤の花」を見ると「副木やフジ棚」に支えられている。
よくよく見ると自立できないのである。

地方債に支えられた中村市の「市花」が副木の必要な「藤」だとは…歴史の偶然ながら皮肉に見えなくもない。

花子　「美しいものにはいつだって支えがあるのが常識よ！」
太郎　「…」

有名となりし幡多路は今もなお　昔のままの山ばかりなり

四万十川ブームが発生してもう 30 年にもなる。
それまでの観光は「足摺岬」へ行く人の休憩地としてしか利用がなくて、観光目的の客は実質「ゼロ」だったのが、NHK の全国放送以来 10 年も経つと年間 100 万人を数えるようになった。

それほどの急成長にもかかわらず、大いなる自然は手つかずのままである。
このままでいいのか？…いや、これでいいのだ！

四万十川を守ったこの地方の特色

① 台風銀座と言われる高温多雨
② 都会からの時間的遠距離
③ 開発に向かない急峻な地形

この地方がこの地方であるべき為には「手つかずの山」は重要である。
便利な「リトル東京」二番煎じの「小京都」よりも、不便な「田舎村」であることが良さそうだ。

夏の終わりのハーモニー

四万十川のカギはガキである！

土木技術は進化する。その証明がこの写真の橋にもある。
向こうから…「国道橋」その手前が「鉄道橋」そして一番手前が「県道橋」（赤鉄橋）…赤鉄橋が河口から約 10ｋｍである。

架橋した順に並んでいる。手前が「昭和元年」一番向こうは「昭和 54 年」に完成している。デザインと年代を比較してみてください。技術の進化＝変化が見られます！

…長いトンネルを抜けるとそこには…
バス停があった！

トンネルを抜けるとサクラが咲いていた！ここから下り坂である！
バス停の名前は「桜カーブ」

太郎　「単純な名前だなぁ！」
花子　「五月になったら“葉桜カーブ”って変わるらしいわよ！」
太郎　「本当か？」
花子　「嘘よ！」

ご覧のようにバスは一日三本ですが…文句ある？

四国には「88」が溢れている！

四国に在って「88」と言う数字は特に馴染みが深い。
弘法大師の「四国八十八ヶ所参り」に因んで住民が身近に感じているからだ。だから四国では「88」と聞いただけで「お遍路さん」と子どもでも答える。

だからか四万十市中村にも「ミニ 88 ヶ所巡り」が二つある。
そして香山寺の展望台の階段も「88」である。等と身近に 88 があるのだ。

と言う訳で太郎は 88 の「文鎮」を作って見た…が極めて不評だ！
何故なら…いまどき「書道」を嗜む人はごく僅かなのと、お遍路さんに挙げようとしても「重い」と断られそうだからだ。

従って今も太郎の机の下で眠り続けている。お接待以前のお節介でした！誰か要りませんか？

お接待は子どもの教育

お節介　明日は我が身の　春の風

場面は…地元の八束中学校野球部の中学生がお遍路さんに「お接待の品」を渡しているところだ。みんなが笑顔であるところが嬉しい！

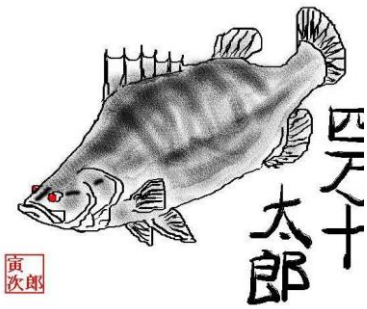
特にお遍路さんの笑顔は子ども達の心を豊かにする教育的な力を持っている。お接待とは「物に託した心のやり取り」なのかもしれない。

順路としては画面「右」は 37 番札所岩本寺で、「左」は 38 番金剛福寺へと向かう、従ってここは言うなれば 37.5 番付近？である！

お遍路さんは　「なんで中学生までが優しいんだ？」
中学生は　　「なんでこんなことで感激してくれるんだ？」

あったか　四万十　あった土佐

アカメ
六尺近い大きな怪魚



古老の漁師の話。

この魚は不味くて食えん！だから捕らん！
餌は生き餌…二度手間掛けてまでして釣るような魚じゃない！
横から銛でついたら跳ね返された！後か下からしか突けん！
肉食やから、値のええ小型種を食う！迷惑なやっちゃ！

話題には上るが　食卓には上らない魚なのです。

満月を　釣って呉れよと　泣く子哉
マジ？

四万十川河口の「オートキャンプ場・とまろっと」近くの駐車場である。その名前も「サンサンパーク」という！正式には「燦々パーク」と書く。その理由は花子と太郎しか知らない。

針のようなモニュメントは、鉄の芸術家「クマさん」の作品ですが、針の先は北極星を向いているそうです。ここは「県立公園」ですからこんな「遊び心のゲージュツ」も許されます。

今夜の月はスーパームーンと云って地球に近い軌道の大きな満月は年に 2～3 度みられます。太郎が「オオカミ男」に変身する夜です。

蛇行する川には川の理由あり　急げばいいってもんじゃないよと

俵　万智

流域面積を流路延長で割ると、河川 1km 当たりの集水面積が出る。
この数値が 1 級河川の中では四万十川が最も小さい。

平たく言えば「蛇行」してるのである。太郎はこの「蛇行率・日本一」が気に入ってる。強いて言えば「生物多様性環境・日本一」なのだ。

都市河川の思想は「いかに早く海に届けるか？」だが、四万十川は違う。「…急げばいいってもんじゃないよ」四万十川には「道草」があるのだ。この道草こそが生物多様性の基本なのだ。

四万十市佐田・友人がハングライダーで撮影したもの

ガマガエルは太郎のライバル？

花子と見詰めあっている。

気を許しているのか？　委縮して動けないのか？　それとも珍しいもの見たさなのか？どれだかわからないが逃げないのだ！花子がカメラを近づけても逃げない！

花子　「私に気があるみたい！」
太郎　「カエルにも近視があるんやなあ！」

カエルが外敵を察知するのは「目か耳か？」どちらだろう？と研究観察した。その結果どうも、目と耳と同程度だが、もうひとつ「人間の足の振動」を察知するようである。だから声を出さずに近づいても、姿と振動で気付かれてしまうようだ。

三種のレーダーを持っているのに写真のカエルは花子から逃げない。不思議だが、この際の理由は簡単である。

花子はカエルに惚れられたのだ。
従ってこの蛙…太郎のライバルなのだ！

四万十川には自然がいっぱいって事は、こんな生物も、くだらない話も、全てがいっぱい在るって事だわサ！

そよ風探偵団

優しい風に吹かれて

四万十川下流域には「サイクリングロード」が整備されている。
勿論、自動車やバイクは走れない、きわめて安全で快適でエコでもある。
強いて言えば「変化がない」かもしれないが、それはあまりにも贅沢と云うものだ。

そよかぜの速度で走れば「風の色」が見えてくるのですが、子ども達は

太郎「風の色がみえたか？」
子供「風の色？…そんなんあるの？…訳が判らん！」

太郎「子どもって正直なんだねえ！」
花子「あなたが子ども以下なのよ！」

何よりうれしいのは「車が来ない」ってことですが、こんな「特区」は絶対に必要です。

9月9日

大切な人の命日です。合掌

中秋の名月と言いますが、その宴は「お天気次第」で運を天に任せます。しかし…案外とこの頃は晴れることが多いようです！

お月さまと潮の干満は大きく関係しますから、四万十川でも下流の河口に近い人々は大いに敏感です。又、水中も大きく関係しますから人も魚も忙しいようです。満月に騒ぐのは「狼男」だけではないのです。

「月」とは自らが光を発しないものの、人間や地球に影響は大きなものがあります。その最たるものが「暦」です。

今の社会のカレンダーは「月(moon)」によって決められています。
野球でいえば「キャッチャー」バレーで云えば「セッター」サッカーで云えば「アシスト」…陽の目の当たる主人公でなくても…輝けるのです。

河口の**渚のシンドバット**
津波ではありません！

四万十川の河口の海では波乗りが出来ます。
サーフイン　スキー　セックス　の「3S」は一度やったら病みつきになると言われてます。成程ですね…

これらはすべて「時と場所」を選ぶのが重要だと言われてますが、四万十川河口には「いい波」が来る場所があります。だから夏には県外からもマニアがやって来ます。四万十川の観光客ではカヌーよりもサーフィンが多いという現実は知っておかないと対応を誤ります。

太郎は若い女性のサーファーを写真に撮るのが好きです。しかし花子にいつも叱られてます。それでも…どうでい？

大空の遊び人

お祭り見物も大所高所から

四万十川下流域には「空の遊び人」がいる！
年齢的にはあまり若くないのだが心が若い！

休日の天候と風の良い日には「空中散歩」を楽しんでる。その離陸前の会話を聞いていると「心の若さ」と共に「熟練の技と知識」が判る。これなら事故はないだろうと思える。

彼らは…（なぜか女性は居ない）心に余裕がある。機械の余裕を「遊び」と云うのだから、太郎は彼らを「大空の遊び人」と呼ぶことにしている。

準備中=情報交換＝親睦

スジアオノリ漁

寒さなんか何のその！

汽水域にしか生えない「スジアオノリ」は水温に敏感だ。
寒くないと成長しないが、最適水温になると「一夜に数十cm」成長すると言われる。年によって価格は異なるものの「一夜に数十万円」の商品発生である。寒さや屋形舟の歓声にもかまってられない値段である。かくして多くの夫婦は川に出るが寡黙である。

採った後の天日干しも大変である。一度干して、少ししたら裏返す！太陽と風を万遍なく通して品質を確保するためである。この作業を撮影しに行っては「ちょっと持って行ったや！」を引き出す名人が居る。わが妻花子である。太郎だとこうはうまく行かないから不思議だ！顔のせいかな？

三軸の連携

四万十川流域住民ネットワーク

1998 年に「四万十川流域住民ネットワーク」が発足した。目的は三軸の連携で…具体的には

Ｘ軸　官民の連携　＝　協働

Ｙ軸　上下流の連携　＝　親睦

Ｚ軸　時間軸の連携　＝　後継者の育成

その時間軸の連携の一つとして、若者の研修と情報発信をした時の写真だ。

彼らは現在では「社会人」となって活躍している。

太郎との世代交代の日は近い！これぞ意図した「循環」の一つなのである。

この写真は「民主党政権」が NPO を踏み散らす前の物で今はもうそんな企画は聞かない。いかに政治家の一言で田舎が迷惑したかの証拠でもある。

考えてみれば「国策の落ちこぼれ」として美しさの残った四万十川なら、「国策」には文句は言えないのかも・・・

舟母

この物言わぬ歴史

まだ「車社会」が押し寄せてくる前は、家庭燃料も「炭や薪」だった。四万十川の奥山の木材は貴重な財産とされていた。四万石の舟で十回分の木材があるから「四万十川」と名前が着いたのではないかとも云われるほどだった。

その搬出は「車や道路」が整備されてない事もあって川を使って「炭」は舟で「木材」は筏として行われていた。その際の「運搬舟」を「舟母」と言った。下りは流れに乗り、上りは「風力と人力」で移動した。

その帆は沈下橋をくぐる時の為に「折りたたみ式」となっていた。

今は「観光用」として再現されているが、昔と大きく違う事は二点ある。それは…

① 船外機というエンジンが備えられている。
② 雨が降ったら「お休み」である！

先人の苦労の結晶は、今は「見世物」である。

築後 23 年の昭和 23 年…「南海大地震」に落ちた！

現在

今では「赤鉄橋」と呼ばれるが、昔は赤くなかったようだ。
終戦後間もなくの「南海大震災」でこの橋は落ちた。その際にこの色に塗り替えられた。

下部工は無事だったようだが、上部工の多くは新しく工事された。
従って「下部工は昭和元年生まれ」「上部工は昭和 23 年生まれ」という複雑な生い立ちを持っている。

親柱には「大正 15 年架橋」と書いてあるが、道路管理者は「昭和 23 年架橋」と思い込んでいる。

ドクターイェローと呼んだら駄目！
「ＤＯＣＴＯＲ　ＷＥＳＴ」

「しあわせの黄色いハンカチ」という映画タイトルからこの色は「幸福」のシンボルカラーになってしまった。　実はこの車は軌道点検車なのですが、滅多に見られないこととその色より、出会うと「幸運」と思えるので沢山の人に喜ばれています。

四万十川の上を走る「土佐くろしお鉄道」にも年に３回やって来ます。
今日はそれにあやかろうと「ハイタッチイベント」がありました。
気をつけてないとしあわせはいつの間にか走り去るようです。

こんな企画には「大の男」はあまり来ません。だから男は不幸で女は長生きするのでしょう。男よもっと好奇心を持て！

　花子　「ちょっとあなたは羞恥心がなさ過ぎる！」
　太郎　「阿呆は長生き出来ると云うもんね！」

たかが列車　されど列車　走れ幸福列車

動いたんですよ！

すごい…？でしょ？

一輌でしたが動きました。エンジンは切ってありました。
一人でしたが動きました。大人が驚いていました！

やればできるんですね…何事も！
家族でも挑戦！きっと「幸福家族」でしょう！五人家族です。

四万十川には幸せがいっぱい！

四万十川の河川敷に四葉のクローバーがあります。
サッカー少年は練習の合間に探します。そして…観光客がレンタサイクルで通りかかるとプレゼントします。当然よろこばれます。すると子ども達も笑顔になります。

観光大使はここにも居るのです。

ただ…採って一時間もすると弱ります、だから早く押し花にしなければならないのが難点です。でも子どもたちはお構いなしです。みんなが笑顔です。四万十川には笑顔が似合うのです。

よさこいの踊り子たちとリリー

笑顔の似合うヒロイン

みんなが「人気者」です！高知市から来た可愛い踊り子さんを歓迎しているのが「リリー」7 歳です。休憩の時はリリーが人気者ですが、踊りだすと今度は子ども達が主人公です。高知市で有名な「よさこい鳴子踊り」も秋には四万十川へ来てくれますが、その時の一枚です。

四万十川には笑顔が似合います。
リリーの笑顔がわかりますか？四万十川では犬も猫も笑うんですよ！勿論…人間も大笑いします！

笑って暮らしても一生　怒ってても一生　同じ一生なら　笑わな損々

犬が笑うことは知ってましたが…最近、猫が笑うことにも気がつきました。ほんとに「自然体」って良いもんですねえ！

落ちアユ漁

今年は突然の「豊漁」でした

2012

調査が開始されて以来アユの漁獲量は減少一途でした。しかし…
今年は豊漁！写真のような有様です。

「網つけて 10 分　アユ外すに 8 時間　大ごとじゃった！」

という漁師の顔はほころんでいました。果たして何が原因なのか？それまでの不漁の犯人探しは見直されることになったのです。

今年だけの状況で犯人捜しをするならば「上流での一網打尽漁法」をしなかった翌年の豊漁ですから、漢字にするなら「我慢」がキーです。

それが判りながら「我慢できない人間」こそが問題ですね！

Behind The Clouds The Sun is shining.
待てば海路の日和あり　　da TOSA

昔の「材木運搬」は筏で川下り

昔、外材が輸入されてなかったころ、四万十川上流の山の木は大切な財産兼商品でした。その頃は車や道路が発達してなかったこともあって、川を使って運び出した。その際の運搬方法が「筏」である。

船頭はほとんど必要なかった。なぜなら岩などの障害物に引っかかったら、放置しておいたら水位が上がり流れて行くからである。

また、橋は「欄干のない沈下橋」なので長ささえ気をつければ材は滞らなかった。急ぐ必要のない昔では合理的かつ廉価な運搬方法だったのである。

それも昔の話となってしまった。車や道路が整備され「筏」は姿を消し、何よりも木材や炭，薪の需要がなくなったのだ。

今の四万十川で「筏」と書けば「遊び」である。
「生業と遊び」…「糾える縄」のようです。

ダムの定義とは

言葉的には…河川にあって水勢を制御する構造物をダムと云うのだが…
河川法では…その大きさに制限がある！それは「高さ 16mを超える物」…従って…

この佐賀取水堰は…ダムではあるがダムではない！
ここでは「扉が 8m」でダムとは呼ばないが…この子たちが居る場所は「地上 25m」

昨年までは「撤去」も議論されたが…「3.11 原発事故」以来「貴重品」化した！勝手なものである！

・・

正式名称は「とんで池」…非公式には「飛んで行け」です！

トンボのヤゴの池・草刈り

四万十川下流の高水式に「トンボ誘致池」がある！最初は人為的に造られたものではあるが、今は自然に馴染んだ「ビオトープ」だ。

最近は周囲に馴染み過ぎて「人が近づけない状態」にまで野性的になっている。そこで「最初に整備したサッカー部」の後輩達が「通路整備の草刈り」と「名板の清掃」をした。少年の作業は「循環」だと思う。

- トンボと人の「共生」
- 人の「循環」
- 自然の「再生」

理屈をつければこんな小さな池にも四万十川の未来が詰まっているのです。

子ども達が苦労して草刈りをした後に、土建屋さんが機械でバリカン刈りをする時があるけど、そんな時は、サッパリ＋ガックリ　です。

花子　「あなたの情報不足！責任はあなたよ！」

「共生・循環・再生」+「情報］…四万十川のキーワードは四つだった。

野鳥観察会

姿を見つけるのは遠くからだが声は近くに聞こえる！

四万十川河川敷に「柳の自生林」と「農地」がある。そこは野鳥の楽園である。堤外（河川敷）の自然環境は一定に保たれているから、鳥達の心配事は「自らの恋」だけである。

だからなのか、よく鳴く！とても囀る（さえずる）という雰囲気ではない。「運動会」と「学芸会」と「遠足」が一緒に来たような騒ぎである。ここで遠慮しなければならないのは「人間様」である。見るだけ…聞くだけではなんとなく淋しいがこれが自然界の掟である。

こうしてみると「人間」とは自然界からはじき出されていることが判るが、その原因は何なんだ？…それは「ルールに対する無知」だろう！

太郎　「焼き鳥食ってるうちは許して呉れんやろね！」
花子　「観察して感激して…それを食べてる人間って変な動物ねえ！」

太郎の自信作

材料費ゼロ

四万十川から取って来た「石」の両端を斬って磨いた。艶が出るまで磨いた。そして小さな穴を空けて一輪挿しとして玄関先に置いた。

花子が正月の「生け花」の残りを生けてくれた。
太郎の正月は…後は「酒」　これで佳い年が迎えられるから田舎はいいなあ！

ねえねえ…お願い！

四万十川の人気者「リリー・7歳」は優しくて可愛いからどこへ行っても
みんなに愛される。

石、笑う！

四万十川の河原の石が歯を剥いて笑ってる！

河原の石には表情がある。そう思って河原を歩くと退屈しない。
しかし、うつむいて歩くのだから「暗い男」に見られてしまう。

怒ってる？

寝ている？

大月町の「蕎麦畑」

2013.9

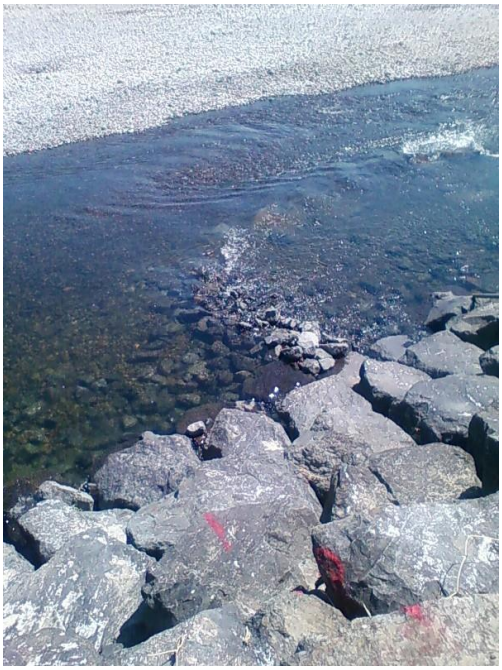
国営農地の今年の花は「蕎麦」である！蕎麦の花には「観賞用」と「食用」の二種類あって、これは前者である。お見事！

花自体の単体では地味だがこれほどの広さがあると「壮観」だ！
ただ見るだけ…田圃の蓮華もそうである。食用にはならない。しかし枯れると次の年の「土の栄養」として役立つ。無駄花ではないのだ。

花の開花後の効用を詮索するのは人間の勝手で、花は来年の為に花を咲かせそして散る。実を結ばない花などない。蝶も鳥も喜び…かくして人間も喜ぶが、花は「床の間の花瓶」の中で枯らしてはいけないのだ。

やはり野に咲け蓮華草…とは「美しさ」と共に「その後」の意味がある！
四万十川に降る大雨も「川底の清掃」に役立つように、自然界に無駄な物はないようだ！

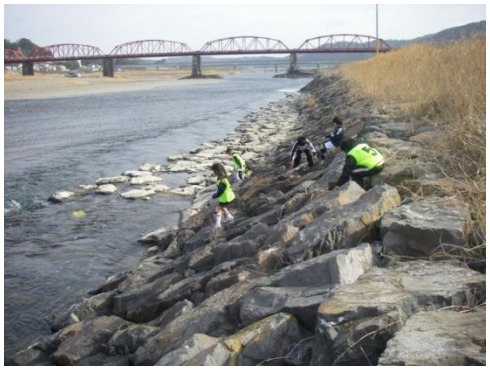
さりげない「多自然」
ガキの悪戯に見えませんか？



小さな石積みだ。何げなく子どもたちが積んだように見えますが、実際は列記とした大人の技術者の「自然維持の為の工夫」なのです。

小石の出っ張りは流れに変化を生じさせている。流れに変化があることで、そこに住む動植物にも変化や種類を発生させているのです。お見事！

向こうの澪筋を鰡（ぼら）が行き来すると、子どもたちは大騒ぎをします。かくして子どもたちはこの川を好きになっていくのです。だから「多自然護岸」には「愛情」と「未来」が同居しているのです。



岩間沈下橋

この沈下橋は河口から 5 番目の橋で「橋脚」が鋼管で出来ているモノでは最上流である。国道から撮影が容易に可能なのと，日照の方向と、対岸の山の佇まいで人気のある沈下橋だ。今では「四万十川ウルトラマラソン」のコースともなっている。

抜水橋に何でしなかったか？それは今でいう「費用対効果」だろう。対岸に民家は少なく、高額の投資をするに躊躇があったのだろう。田舎の景観とは先人の経済感が生んだともいえる橋である。

「不経済」と「自然景観」は大いなる関係があることが判る。

何事もないよに過ぎる一日が　素敵なんだとこのごろ思う

夕方になると散歩！…「変わったことがなくて良かったね！」と終われるのが最高の一日です。「明日も明後日もずーっとこうだったらいいね」って二人の背中に書いてありますね！

大震災が「来るぞ！来るぞ！」って政府の報道は「安全」の為なんでしょうが、決して「安心」の為ではないような気がします。それが証拠に騒ぎ始めたのは 3 年前の 3 月 11 日以来ですものね。それ以来、心穏やかに暮らせない人が急増していますぞ！

今、心躍る人たちとは「防災関連事業者」と「土建屋さん」です。

今一度「私有財産に関する権利」と「行政の義務」を整理するするといいですね。

満月

写真いいですか？

春の四万十川の風物詩となってしまった感のある「入田の黄色い絨毯」です。まだ若いラブラドールを連れた若い女性が来た。

太郎はとっさに

「写真いいですか？名前は？」
「いいですよ！名前は“はる”っていいます！」

しかし「プライバシー」と「肖像権」の関係からか横向いてしまった。
帰って花子に話すと…一言！

「口も写真も下手！」

菜の花祭りはみんなの心も会話も明るいのです。

私の名前は「きなこ」です！
警察犬になりたいんですが…

警察犬の試験を幾度となく受けているのですが「合格」しません。
不合格でもチャレンジを続けていますが、その健気さがマスコミに取り上げられて人気者になってしまいました。

四万十川にも警察犬を飼育訓練している人が居て、その方の口利きで「きなこ」がやって来ました。大人気です。

判官びいきは「日本人の美しい心」の表われでしょうから人懐こい「きなこ」も嬉しそうでした。

それにしてもこの人気！中村の市議会議員選挙なら「きなこ」の応援だけで当選しそう！

女郎蜘蛛大会

八月のお祭りの行事の一つとしてこの大会があります。蜘蛛の喧嘩ですが、歴史があります。

応仁の乱を逃れて来た公家に同行した官女達が「退屈しのぎ」に始めたと云われますから 1500 年もの歴史があるのです。

このように「小京都中村」は「碁盤の目の街並み」ばかりでなく、行事でも「大文字」やこの「女郎蜘蛛大会」のようなソフト面での伝統の継承がなされているのです。

行司の後から見ると、まさに「真剣勝負の眼差し」ですね！

天国自衛隊？

四万十川の公道で前からこんな車が走って来ました。

これにはびっくり！腰を抜かさんばかりのびっくりでした。しかし「長生きの秘訣は不義理と色気と好奇心」とわきまえてる太郎は「Uターン」して追いかけました。追いつきました。相手は昼食でした。

戦争の匂いはしませんでした。

災害の時は「最も頼りになる」事は知っていますが、銃を突きつけられるとちょっと複雑です。

今回は偶然街で出会ったのですが、次に会えるのは「四万十川の堤防が決壊」した時かな？

太郎　「それにしても「抜き身の刀」で外に出るのかよ！」
花子　「田舎のトンネルなら頭打つわよ！」

十六夜の「月よりの使者」

かぐや姫の帰る舟に乗り遅れたカマキリが天を仰いでいるのでしょうか？それとも地球に残されて喜んでいるのでしょうか？

いずれにしろ勝手な話ですね。

中秋の名月の頃は「夏と秋」が混在します。季節の変わり目を何で知るのかによって人生が変わります。自然界の変化で知ることのできる田舎は良いモノです。心を豊かにしてくれます。

四万十川では「川で泳ぎたい！」と子どもたちが云わなくなるので助かりますが…ちょっと寂しい気分でもあります。

等身大

太郎は知らなかった！
この大きな男がアメリカでは超有名だと云う事を。

隣のスポーツ店で不要になったモノを頂いたのだが重宝してる。
「押し売りや長居の客」が来なくなったのである。

スポーツ的に考えると、「体重別」という制限のあるスポーツはあるが、身長制限のあるスポーツはあまり聞かない。これでは勝負にならない。現実と非現実の同居である。

参加することに意義があるって？　その意見には異議がある！ちょっと見ただけで勝負は決まっている。

きっと四万十川を見た都会の河川関係者も同じ気分だろう！

花子　「何を偉そうに！」
太郎　「？」
花子　「四万十川は名前だけよ！実物を見なくっちゃ！」
太郎　「m」

何してんの？

実は「稚児がに」の写真を撮ってるんです。

四万十川の河口から約５ｋｍの砂州の雑草を除けたところ大量の「稚児がに」が現われました。驚くほどの希少種ではないけれど、驚くほどの数だったので「観察会」を開きました。

カニの写真を撮影しようとしても、姿を見つけてから近寄ると素速く穴に入ってしまいます。そこでカニが油断して穴から顔を出すのを待っているのです。

二人の手にはカメラ　カメラの先にはカニが出てくる予定の「穴」があるのです。意味が判らないと怪しげな二人ですが、意味が判れば何となく楽しくなる写真でしょう？

四万十川にはカニも幸せも隠れているのです。
カニの気持ちになって幸せを見つけましょう！

四万十川の距離はここから測り始めます！

海との接点=下田港

四万十川の主な地点までの距離を整理しました。

河口からの距離	地名	特徴
0.00	下田河口	
9.50	赤鉄橋	汽水域限界
14.80	佐田沈下橋	最長沈下橋
22.50	高瀬沈下橋	
24.00	かわらっこ	
36.00	岩間沈下橋	鋼管最上流
44.00	江川崎カヌー館	
52.00	半家沈下橋	
63.00	道の駅とおわ	
64.00	鯉のぼり公園	十和
88.00	梼原川合流点	大正
98.00	向山沈下橋	中間点
117.00	窪川	窪川
130.00	一斗俵沈下場	最古の橋
196.00	不入山	源流点

四万十川の堤防に大根が…
干してありました！

堤防に干してありました。片づけるの忘れているのでしょうか…翌日もこのままでした。綺麗に並んでいますからきっと几帳面な人の作業でしょうに…

太郎と花子は…毎春、これを見ないと落ち着かないんです。

大根足のラインダンス

四万十川の流域の 95%は「山林」
その保水力は「緑のダム」

四万十川流域面積＝2,186ｋm^2のうち 92%が山林である。
その山林が保水力をもつ「健康な山」であれば、ダム機能を持つことができる。これを「緑のダム」と表現する場合もある。造語であるが意味は充分に理解できる。しかし山林が健康であるためには「人の手」が必要である。

その人手が山に入るためには「採算」が見越せなければならない。残念ながらその見通しが立たない今は、林業に携わる人が確保できないままである。

林業経済学が確立して「健康な山の復活」が出来てこそ「日本最後の清流」の名前が維持できるとすれば、行政の為すべきことはおのずと判るのだが…ここにも「縦割り」の縄張り争いが見え隠れしている。

川と山と経済の融和…エゴがあってはエコは成り立たないってことだ！

ニホンカワウソ
もう居ないらしい！

昔はこの珍獣は沢山いた。だから珍獣ではなく迷惑な小魚乱獲ハンターだったのだが、河川が整備されて「住環境」が悪くなり、小魚が減って「食環境」も悪くなり、ついに「絶滅」を宣言されてしまった。

全盛期には「害獣」…減ってきたら「珍獣」…今となっては「幻の希少種」と呼ばれている。昔の「軍歌」と同じだ。

四万十川支流「中筋川」は周辺の山が水辺に近くて、この珍獣の往来に適当だったのと、山林の整備が遅れたこともあって、遅くまで生存が確認された。一日の移動距離が 40km とも云われる彼ら彼女らにとって、杉の無い山と、人の来ない川は天国だったのだろう。しかし、今では「鉄道」「高規格道路」「工業団地」「ダム」と並ぶ川になってしまってる。

絶滅を悲しむ声は聞こえるが、「高速道路延伸推進」の声も聞こえる。

　　カワウソ　「げに、ここは天国よ！」・・・天国にて！

水際探偵団

稚児がに観察会

四万十川流域住民ネットワークの活動の一つに「時間軸の連携」がある。具体的には

*「後継者の育成」＝「青少年の健全育成」でがある。中でも
*「子ども達が四万十川を知る」＝「四万十川を好きになる」…

と言う事で「シュノーケルを使った水中探偵団」と共に「川の生命線である水際を知ろうと云う水際探偵団」を行っている。そこで今日は水際の「稚児がに」を観察する日だった。

「Jr バレーボールクラブ」の可愛い女の子達が参加した。この子達は県選手権連覇中でこの五年生は翌年には全国制覇もした逸材ぞろいである。

稚児カニが巣穴から出て来るまでの数分間の静寂が「男子サッカー部」には無理だったが、この女の子たちは忍耐強く待つことが出来た。

集中力の差がこんな処でも垣間見える！

ある特訓

中村高校の後の川にて

新入部員の特訓だろうか？それとも自主練習？…いずれにしても見る方にしてみれば長閑である。

この堤防の後の「県立中村高等学校」は 11 人の野球部が甲子園の春の選抜大会で「初出場・準優勝」を飾ったことで有名だ。その後、進学拠点校となり「スポーツ」では大きなニュースはないが、最近では「県立の中高一貫指定校」として高知県内では有名である。

文化活動も「六年制」を利用して活発で、ブラスバンド部も中学生と高校生が共演している。

菜の花コンサートにも出場してくれているから市民にも御馴染で皆に愛されている学校と部員達である。

この写真は、我愛妻花子が先輩風を吹かせて、本人の了解を得て撮影したものです。念の為！

山奥発四万十川経由下田乗換大阪行き

昔は「薪や炭」が良く売れた！

四万十川の山奥で焼かれた炭は「舟母」という川舟で河口の下田港まで運ばれ、そこでいったん陸揚げされ集荷保存された。そして大きな海の船に積み替えられて京阪神へと売られて行ったのである。

LPG や石油ストーブが普及するまでは大賑わいだったのが、四万十川河口の「下田港」だった。そこでの作業の多くは女性だった。

今の世なら「大ブーイング」だろうがその頃の女性は強かった。

台所に「冷蔵庫」はない。お風呂は「薪」洗濯は「手洗い」トイレは「和式」…平均寿命は男性が長かった。そして東京オリンピックをきっかけに女性の周辺は変わった。

電気冷蔵庫・自動洗濯機・自動皿洗い機・石油ストーブ・エアコン・ウォッシュレット…そして余った時間の為にカラーテレビ。戦後の発明や工夫は女性の為に成長したと云っても過言ではない。しかし…これで満足しないのが今時の女性だ。「もっとー！」挙句の果てに

「御墓は別々にしてね！」

寅さん

第 49 作目は幻となりました！

今から 18 年前の 8 月 4 日に渥美清さんがご逝去されました。

実はその日は、第 49 作目「男はつらいよ花遍路」の現地調査に太郎は御付き合いしていました。「シナリオハンティング」と言うのだそうですが、その最中に「寅さん」が亡くなられたのでした。

「寅さんを呼ぶ会」を立ち上げていた我々にはショックでしたが、その頃は国民みんなが悲しみました。

48 作も撮影して、外国まで行って、高知県には来たことがなかった事は少しショックでしたが、そこで…何でや？と理由を考えました。理由は二つありました。

① 時間距離が遠い！スケジュール調整に苦労する！
② 経済的に弱い！　大きなスポンサーが居ない！・・決定的でした。

希少価値とは「落ちこぼれ」の事を云うんですね！

菜の花と少女達

季節には似合う色がある。春の四万十川にはこの色が似合う。
この背景は「新緑」…夏には「灼熱の赤」…秋には「空の澄んだ青」晩秋の上流では「紅葉」があり…冬には「白と黒のコントラスト」

春になると菜の花の前に「桜・モモ・梅・杏の花」が咲き誇る。
これらに共通するのは「暗い背景」だ。

どんなモノも背景に恵まれなかったら見栄えがしなくなる。

四万十川が「日本最後の清流」ともてはやされる背景には「都市河川のやり過ぎた合理化」がある。川の水を一刻も早く海に届けると云う思想が国策で進められた都市河川行政、それに落ちこぼれた四万十川が「佳く見える」という背景が四万十川の今日の名声を作ったとすれば、四万十川の背景は「国策」なのだ。

四万十川が成長したのではなく、都市河川の環境が後退したから四万十川が前に見えるだけ！これが「太郎流・四万十川相対性理論」である。

花子　「菜の花からよくまあ変な理論に展開できることよねえ！」
太郎　「わかったぁ？」
花子　「その程度は“はな”から判ってるわよ！」
太郎　「jyejyejye！」
花子　「もう古い！！」

四万十川流域住民ネットワーク最初の 10 年の活動歴（1996～2006）

川の流れのように

和暦	年度	西暦	国の動き	高知県の動き	四万十川周辺	我々の動き
昭和	56	1981	河川環境管理基本計画			
	57	1982		NHK全国放送		
	59	1984				中村少年サッカークラブ発足(7/28)
			ふるさと創生資金			
平成	2	1990	多自然型川づくり			
	6	1994		「四万十川」に呼称統一		
	7	1995		四万十川対策室発足		
	8	1996		四万十川総合プラン21制定		四万十川流域住民ネットワーク発足(H.9.2.7)
	9	1997	河川法改定			
	10	1998		四万十川構造令検討実施		四万十川未来2050始動
	11	1999				
	12	2000				
	13	2001		四万十川条例制定	四万十・流域圏学会発足	
				佐賀取水堰水利権更新		四国河川文化ネットワーク発足(2月)
	14	2002	自然再生法制定			四万十川自然再生協議会発足(11/7)
	15	2003				
	16	2004		四万十川条例施行規則発効		
	17	2005	統合河川環境整備事業		川での福祉と教育全国大会(11月)	
	18	2006		四万十川保全条例発効		
	19	2007	河川法改正10周年	ルネッサンス協議会終結(再編)	水環境フェア(8/5.6)	
						ふるさと普請椿原＝三世代交流
	20	2008				
	21	2009				
	22	2010				
	23	2011		佐賀取水堰水利権更新		

最初の 10 年は慌ただしかった。

マスコミに追いかけられた「行政」は「協働+連携」と言いつつ民間人に色々の役目を押し付けて来た。無理もあったが「波に乗る必要性」も感じていた「田舎民」はそれに応じた。かくして「観光客ゼロ」から「観光客 100 万人」まで成長したのだった。

「四万十川ブーム発案仕掛け人」は居ないので、地元民は誰にも感謝できなかった。

逆に、成長に努力した人に感謝でなく「嫉妬」したようである。この「嫉妬」こそが四万十川ブームがそれ以上発展しなかった理由だと気がついてないようである。簡単に言えば「地域性」である。

四万十川の子ども達は東大生？

（第三種郵便物認可）　1999年（平成11年）4月10日（土曜日）　言

水質浄化 東大教授に学ぶ

四万十川ネット

児童ら熱心に"受講"

家庭用の装置開発も提案

講義の後、松本教授（右から5人目）と記念撮影する子どもたち（東京大学で）

四万十川の清流を未来に残す「四万十未来2050プロジェクト」を進める四万十川流域住民ネットワーク（二県十二市町村の民間二十一団体加盟）のスタッフ三人と地元の児童生徒九人が東京大農学部の松本聰教授を訪ね、排水浄化システムの仕組みや効果を学んだ。

同プロジェクトは、西暦2050年を目指して同川を次世代へつなごうという活動。子どものころからネットワークへの参加やリーダー育成を進めようと流域の子ども同士で交流を深めている。

松本教授は、同川中流域で実施している集落排水システム「四万十川方式」の考案者で、県の「清流四万十川総合プラン21」推進委員会の前委員長も務めた。プラン策定時から同ネットワークの西内燦夫さんらと交流があり、同ネットワークが今回「自然と水」のテーマで子どもたちへの講義を申し入れたところ快く引き受けてくれた。

訪れたのは、加盟団体の推薦を受けた中村市、西土佐村、十和村など七市町村の小学五年生から高校三年生まで。二泊三日の日程で上京、東大では、松本教授が卒業式の合間を縫って約二時間、木炭や砂利などを使う四万十川方式の内容をかみ砕いてわかりやすく説明した。

講義に感激した子どもたちは、四万十川方式に自分たちのアイデアを加えた浄化装置を家庭で作ることを提案、松本教授もその指導のために同流域を訪れることを約束した。子どもたちはまず自分たちで設計図を作成して松本教授へ送ることにしている。

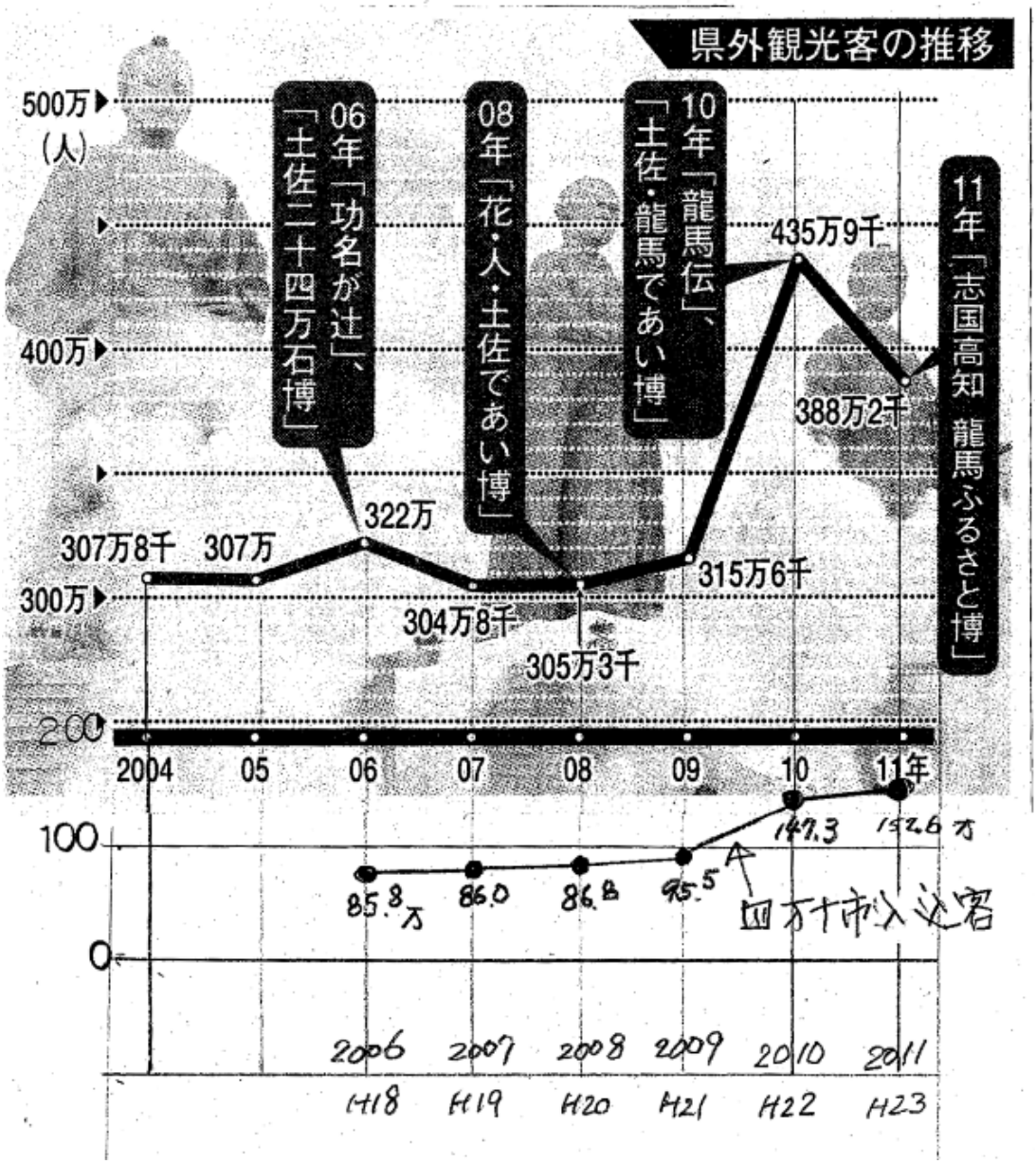
上京中は、国立科学博物館なども見学し見聞を広めた。西内さんは「すぐには効果が出ないかもしれないが、必ず将来の清流保全へ布石になってくれると思う」と話している。

同ネットワークは、県や流域市町村の支援も得て二年前に発足。市町村の枠を超えて清流保全と地域づくりに取り組んでいる。

NO4
「四万十未来2050」

2－2

NHK 全国放送と観光客との連動性



昭和 58 年の NHK 全国放送で四万十川の観光客はそれまでのゼロから平成 8 年の 100 万人までに増えた。テレビの力恐るべし！

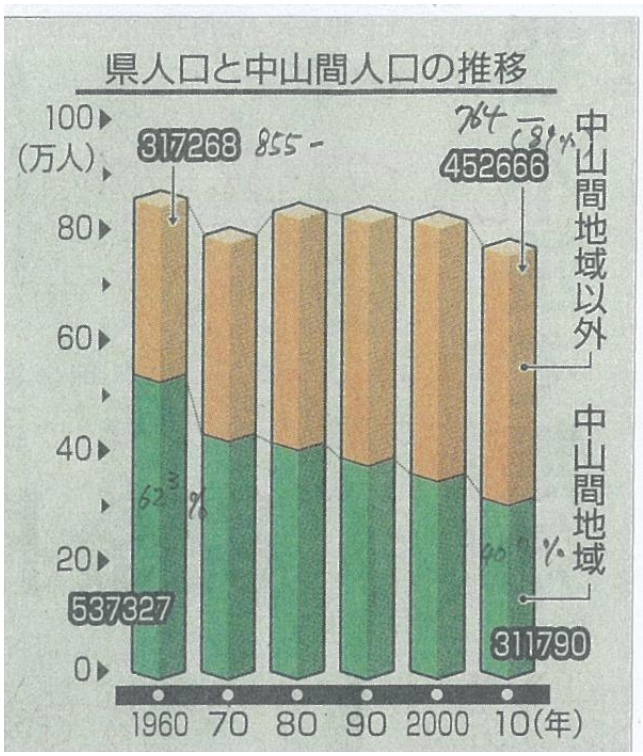
その後「異常気象報道」から 100 万人を切っていた。その後の状況が上の高知新聞の報道である。

またもや「坂本龍馬」の全国放送のおかげで 100 万人を突破した。
観光客増やしかったら NHK にお願いするが一番！

早急に「森林経済学」の確立を！

高知県の行政人口は「商業人口≒観光人口」を下回ってしまった。
又中山間地の人口も 50%を切ってしまった。

都会の人口が増えたからいい！って問題じゃない。高知県は山林県で全体の 80%以上が中山間地でここが元気でないと県全体が疲弊するのだ。



高知新聞より

中山間地とは「林業と農業」が両輪である。衣食住の 2/3 がここに在る。特に「自給自足」が必要な場面では、秋葉原よりも四万十川が大切になるはずだ。

都会の密集地の「選挙の票田」よりも、「田舎の田圃」が大切ぞ…ねえ石波さん頑張ってね！

四万十川の治水を考えた場合、「緑のダム」と「田圃のダム」は絶対条件と言ってもいいほどに重要なのだ。だから「危機は続く」だ！

菜の花コンサート

花には若さが似合います。

柳の群生林の低木を伐り草を刈りました。すると…地面に太陽が届くようになり菜の花が咲き出しました。驚いたのは人間と小鳥たちです。

人間は「観光の目玉が出来た！」と喜び、小鳥たちは「身を隠す藪がない！」と悲しみながら場所替えしました。皆伐は良くないですね。しかし…

喋ることのできる人間だけは、今もはしゃぎ続けています。夜までも…

すまし顔です！

ヒヨドリ

桜の咲き始める３月の中ごろから「小鳥たち」も大忙しです。啓蟄も過ぎると何もかもが動き始めるのです。四万十川の春はにぎやかです。

動物も植物も連鎖して春を迎えます。もちろん人間も…

花子　「いい写真でしょ？」
太郎　「この鳥…カメラ目線だな！」

距離にしたら 3～4mですが，花子が近付いても逃げません。太郎だったらとてもそんな距離は許してくれませんから、花子には鳥が気を許す何かがあるようです。そういえば、二人並んで山にいても花子だけが「蚊や虫」に好かれて刺されるんです。

太郎　「臭いんじゃない？」
花子　「あなたは皮が厚いのよ！顔から始まって…」
太郎　「何てことを！」

防災植物とは

非常食

四万十川流域の 95%は山林です。緑がいっぱいです。それでなくても「工場や住宅地」の少ないこの流域には植物がいっぱいです。そこで…

東日本大震災のような地震災害が発生した時の為に、非常食となる草花を整理しました。つまり「毒」のない草花の展示です。これは澤良木　庄一先生（元高校校長）が発案＋整理＋展示してくれたものです。

日本は国民の食材のほとんどを輸入に頼っていますが、いざ有事で輸送路が封鎖されたとしたら、自給自足の生活をしなければなりません。

災害や有事の時の事を思えば「過疎」と「自然」は有利な材料です。いざとなったら、わが息子や娘の疎開先となるでしょう！

花子　「いざとなったら…遠いわね？」
太郎　「歩いては無理だな！」

今は有事が「起きないと」信じるしかないが、そんな確証はない。

オオハクチョウ現る！

2012.3

北国では珍しくないらしいが、四万十川では大騒ぎで、花子なんぞは「たった一羽で夜も寝られず！」状態だった。

案外と人を恐れない…とは言いながらも、ある一定距離で飛び立ってしまうし、羽根を休める場所が岸辺から離れた中洲なので写真も自由には撮れない。

執念で頑張った花子の一枚である。

このオオハクチョウは大きくて目につくから「地元民」でないことは太郎にも判るが、敏感な花子に聞くと年間数種類の「異邦人」を見かけると云う。
まあ、境界線を持たない自由な鳥は季節や気候によって「最適地」を探すことは自由なので驚くべきことではないかもしれないが、固定的な先入観と浅学な人間にとって「自然」とは多くの事を教えてくれていることが判る。

後はその人の「学習意欲」と「愛護精神」が大切である。

南国土佐にも雪は降る

年に数回 10cm 程度の積雪が…

夏に毎年数回「水没」する沈下橋も、毎年冬には数回「積雪」に見舞われる。
車は雪国のような装備をしてないから概して「臆病」になる。

雪が降ったら高速走行はしないのだ。かといって渋滞することはない。なぜならば車の数が少ないのと、雪の日は女性ドライバーが出てこないのだ。

雪国の人は「迷惑だ！」と云うが、南国の人は「大喜び！」希少価値なのだ！
この辺で迷惑してるのは「隣の猫」だけである。

本日休校！

バスは遅れ、自転車はスリップ！

登校途中の学生達が「休校」の知らせを聞くとこうなった！

「やったあー！」
「おいおいパンツ見えるぞ！」
「大丈夫、今日は体操着！」

以前、山形県から来た女子高生に

「雪だるまがいっぱい造れるからいいね？」と話したら
「雪だるまなんか造りませんよ！」　と呆れたような返事だった。

聞けば「雪が多過ぎて冬は休業するスキー場」がある。そうだ！「じゃあ設備が無駄なんじゃない？」と聞くと「夏スキーやってます！」

「常識外れだ！」というと「それが常識です！」と高校生に教えられた。

四万十川から海へ出れば
熱帯魚の漁もやってます？

四万十川から海へ出れば「土佐湾」では珊瑚漁をやってます。

魚よりも単価の高い珊瑚を捕るのですが、その珊瑚の網に魚が入って暴れると、肝心の珊瑚が痛みますので、魚を予め逃がすためにこんな派手な網になったそうです。

いつもは魚を捕るために見えにくい網が良いのですが、今回だけは魚を近寄せない網が良い網のようです。知らない人が見ると「異口同音」に…「熱帯魚用でしょう？」と云います。

それにしても珊瑚の単価が高いのは「中国の富裕層」のせいだと言いますから、少し悲しくなってしまいます。

珊瑚の品質も「桃色」が良品で「真っ赤」は安かったのですが、中国の影響なのか最近は「赤」の単価が高くなっているそうです！

やっぱ「中国人」は「赤」が好きなんですね？

トンボ公園の「フナ釣り大会」

子どもの「フナ釣り大会」には 3 つの目的があります。

① フナはトンボのヤゴの敵です！
② 子ども達の好奇心を満たします！
③ 教育的冒険

ミミズを掘って　針につけ　フナが釣れたら針から外し　水槽に入れる。
こんな「何でもない作業」が出来ない子供のための「特訓」も兼ねています。

幼い日の思い出は一生の宝なのです！

付き添いのお母さんが「ミミズ触れないわ！」と騒いでましたが、30 過ぎたら「時効」ですね！

慣れた子は、自ら「ミミズ」を探して掘って来ます。
勿論、魚も掴みます。「四万十川のカギはガキである！」と叫ぶ太郎にとっては嬉しい子ども達です。

遅咲きの恋の川渡り

四月になるとカヌーも出て来ます！

「鯉の川渡り」は民放 TV ドラマ「遅咲きのひまわり」の遺産ですが、結構人気があります。今の若い人は「電波に乗ってやって来ます！」だから、地元関係者は TV に敏感です。

地元飲食店でも、地元では人気がないのに観光客がやって来る店がありますが、その功罪は別として、「情報」を操る人が成功する時代です！昔は「噂」今は「インターネット」…大切なのはそれからです。

カツオです！

川は上れないでしょうに…

カツオには「上りカツオ」と「下りカツオ」がある！
春先に南から北上して来るものを「昇り」といい、秋に下って来るのを「戻りカツオ」と呼ぶ。

目に青葉　山不如帰　初鰹　　とは上りカツオの事を云ったのです。

そのカツオを捕る船で有名な「黒潮町・佐賀」がまちおこしの為に「カツオ幟（のぼり）」を作って五月の連休にあげます。

だから、この時期に獲れるのは「上りカツオ」なのです。

この地方で「新鮮なカツオ」の事を「ビリ鰹」と云うけど、これは英語であって「vivid」から来ていると太郎は信じている。しかし…

地元漁師さんでこれを信じる人は皆無である。勿論花子も…